

鷗尾の調査・橿原市の仏像調査

飛鳥資料館

飛鳥資料館では昭和55年度秋期特別展示「日本古代の鷗尾」展と、56年度春期特別陳列「橿原の仏像」展の開催をめぐりそれぞれに調査を実施した。その成果はすでに図録『日本古代の鷗尾』および『橿原の仏像』として刊行したが、ここでは各調査の概要について報告する。

鷗尾の調査 鷗尾は唐招提寺金堂伝世例をはじめ、いくつかの完形例がよく知られているが、最近の寺院跡や宮殿跡調査の増大に伴い、その資料数は断片とはいえ比率的に増加しつつある。今回の調査では現時点における出土例と、絵画・古記録例など関連資料の集大成と、それを基礎に最も資料が集中する畿内における様式変遷の概要を把握することを主目的とした。調査では福島県—新潟県から大分県—熊本県に至る各府県の寺院・宮殿官衙・瓦窯跡など122遺跡から出土した213例の存在を確認したが、調査期間の制約や、古く出土した例についてはその所在がすでに不明となっている場合もあって、残念ながらそのすべてを調査することはできなかった。しかし、公私の博物館、各府県教育委員会などの御協力を得て、そのうち107遺跡、198例の調査を終了し、当初の目的の一つである集大成をほぼ達成することができた。

今回調査した資料の大部分は断片で、複雑な形状を有する鷗尾のどの位置を占めるものかを確定する必要があった。そのため、調査では断片の写真撮影、拓本・実測図の作成と、製作技法の詳細な観察を併せて行ない、各断片の原位置への復原と、それに基づく全形の推定復原、様式の変遷を最も的確に示す縦帯部の文様帯復原を主眼に行った。その結果、畿内における飛鳥時代から平安時代にかけての様式変遷の基本的な方向と、各地に地方寺院が相次いで造営される白鳳時代に、瀬戸内、山陰、近江、美濃などに地方様式と呼ぶべき特色を持つ一群が分布することが明らかとなった。また、これとは別に、縦帯に篋型による蓮華文を飾り文様帯とする一群が、畿内から山陰にかけて約10ヶ寺分布することが明らかになるなどいくつかの成果があった。以下、その成果の一部を要約しておく。

畿内においては、百濟および高句麗の影響を受けた百濟様式の鷗尾が飛鳥時代から白鳳時代にかけて盛行する。その最古の例は飛鳥寺中金堂出土例で、縦帯で画した胴部と鱗部の全面に幅の狭い段型を削り出すのを特徴とする。この特色はその後、段型の幅が徐々に広くなるという変化をたどり、胴部の一部における段型の省略の過程を経て、白鳳時代にはついに胴部無文の例が出現する。一方、縦帯は沈線から削り出し突帯へ、さらに貼りつけ突帯へと変化し、その幅も徐々に広がる。白鳳時代に至って、この幅の広い縦帯に珠文・唐草文・蓮華文を装飾として加える例が出現し、さらには縦帯を複帯構成として異なる文様を飾る例もこの時代に登場する。飛鳥時代にはこの他に羽根形文様を飾る一群があり、また、和歌山・新潟などに別系統と考えられる古式な様式の存在も知られており、朝鮮半島からの鷗尾様式の受容が単一ではなかったことを示している。また一方、白鳳時代に初唐の影響下に新たに成立した唐様式の特

山田寺

法隆寺

平安宮

色は、頂部を鱗がめぐらずに途切れ、頂部が前方に突出するという形態を示す点にある。しかし、その装飾は同時期の百済様式の装飾を受け継ぐもので、縦帯を複帯構成とし珠文や段型をあらわす。奈良～平安時代は唐様式のみが知られており、複帯構成とする縦帯に葡萄唐草文や宝相華唐草文など時代の趣好をよく表した例が盛んに用いられた。

なお、展示と図録作製にあたっては観覧者の理解が得られない恐れがあったため、完形資料の展示と復原図の作製につとめた。その代表的な復原図を掲げておく。ただし、復原に際しては特に全体の形状などの点で必ずしも正確を期せなかった例もある。今後の資料の増加をまって訂正したいと考えている。

橿原市の仏像調査 昭和52年から実施してきた飛鳥地域の仏教美術調査も、今回の調査をもって一応終了することとなった。調査は市内に存在する約140ヶ寺のうち、浄土真宗を除く約80ヶ寺を対象として昭和55年11月から56年3月にかけて行ったが、今井町内および二・三の真宗寺院については調査対象に含めることとした。その結果、平安時代から江戸時代にかけての約800点の彫刻、絵画、工芸品が見い出されたが、なかでも仏像彫刻は平安時代から室町時代にかけての優れた作品が約70軀も確認され、古代から中世にかけての当地の繁栄の様がうかがわれた。ここでは、今回の調査で新たにその重要性が確認された作品を中心に紹介する。

平安時代の作品では十市町正覚院の3軀が特に注目された。現存最古の作品である地藏菩薩立像は三尺に満たない小像であるが、両手首を削ぎつける他は台座蓮肉部までを含むほぼ全容を檜の一材から丸彫りする作品で、目鼻立ちや衣文を鋭く刻み、平安前期の一木像の特色を顕著に示している。また、天部立像は等身の一木像で、細部の表現がやや省略されているが袖口などに翻波式の衣文が認められ、地藏菩薩像に次ぐ10世紀前半の作品と考えられる。一方、周半丈六の大きさの大日如来坐像は頭体部の均衡もよく、体軀の肉付けも抑揚があり、11世紀末から12世紀前半にかけて制作された本格的な寄木造りの作品として注目された。この他、久米町久米寺の伝薬師如来立像、見瀬町阿弥陀寺の十一面観音立像、北八木町延命寺の十一面観音立像など、10世紀から11世紀にかけての素朴な一木造りの古像約10軀が伝えられており、ま

た、葛本町安楽寺の薬師如来坐像、山之坊町阿弥陀寺の阿弥陀如来坐像など、小品ながら本格的寄木造りになる12世紀後半の作品もいくつか確認された。

市内の仏像作品の特色はむしろ中世以降の作例が多い点にある。鎌倉時代前期の作品では五条野町正楽寺の阿弥陀如来坐像が注目された。本像は頭体部の均衡や技法面で旧様を伝えているが、衣文などに力強さが増し13世紀に入っている作品と見られる。また、鎌倉時代後期の作品としては2軀の聖徳太子二歳像が注目された。大久保町の旧大窪寺観音堂像は頭部内に正安4年(1302)の墨書銘があり、在銘作品としては米国に流出した正応5年(1292)像に次ぐ古例で、また、新に見い出された曾我町東楽寺像は体軀の象形が的確であり、厳しい表情やくせの強い肉付けに特色が認められ、大窪寺像にやや遅れて制作された作例と考えられた。

室町時代以降の作品では椿井仏師や宿院仏師などの在銘作品が多いことが注意された。椿井仏師の作品としては慈明寺町慈明寺の十一面観音立像が文亀2年(1502)に椿井舜慶によって制作されたことが知られていたが、今回、東池尻町妙法寺の大日如来坐像が文安2年(1445)椿井式部の作であることが判明した。宿院仏師の作品は、東竹田町竹田神社の大日如来坐像(弘治元年、1555)と、旧大窪寺観音堂の不空罽索観音立像(永禄6年、1563)が知られていたが、新たに五井町薬師堂の薬師如来坐像(永禄8年、1565)が見い出された。不空罽索観音立像は後世に漆箔を施している点が惜しまれるが、台座・光背ともに当初のものが残る完好な作品として貴重なものである。この他に室町時代の作品では、寛正4年(1463)、大仏師備前定英の作であることが確認された戒外町興善寺の文殊菩薩騎獅像及び脇士像と、久米寺の善無畏三藏坐像が特色ある作品として注意された。特に善無畏像は画像を忠実に彫刻に写した珍しい作例であることが注目された。

(大脇 潔)

正覚院地藏菩薩立像

同、天部立像

同、大日如来坐像

東楽寺聖徳太子立像